

三河アララギ

平成二十三年

三月号

第五十八卷 第三号



ニューヨーク日記(53) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

January 26, 2011 : A Wintery Mix

Blue Shoe Diaries



今年の冬は世界中が寒いみたい？NYでも結構雪がよく降っています。外をうろうろするには寒いし滑るしで楽しくないけど見慣れているはずの会社の食堂からセントラルパークがこんなに綺麗なのにビックリ！毎日のように見ているはずで見えていない物って多いよね。もったいな〜い！

This winter's been harsh everywhere. It's been snowing a little too much in NY too. Icy or slushy streets are gross and too cold that it brings out the worst in people. Passing by the cafeteria at work, I was surprised to see the beauty in this horrible weather. A view that I'm too used to to recognize the beauty, today, I was lucky enough to see it.

目次

第五十八卷第三号(通卷六八七号)

表紙(巻)	今泉 由利(1)	雪の道ゆく	小野可南子(26)
ニューヨーク日記(53)	Blue Shoe(2)	過去と	山口千恵子(27)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より	(4)	薩埵峠	夏目 勝弘(28)
歌集・本の木	杉浦 弘(5)	風	秋山 逸穂(29)
天つ雪	岡本八千代(6)	「パリ2011年1月」	井村 喬泉(29)
春の香り	白井 久吉(7)	ことよせ	いしはとぶ(30)
湧水	今泉 由利(8)	贈呈誌一月号	伊藤 忠男(30)
くじけるなかれ	伊藤八重子(9)	俳句	白井 信昭(30)
小正月	弓谷 久子(10)	私の一首	植村 公女(32)
初春	青木 玉枝(11)		一石(32)
貴重な	北川 宏廸(12)		喜仙(33)
母さんの音	安藤 和代(13)		皓一(33)
誕生日	林 伊佐子(14)		金津 文枝(34)
木曾の檜	内藤 志げ(15)		清澤 範子(34)
明けの明星	胃甲 節子(16)		近藤 映子(34)
リズムよき	佐々木利幸(17)		佐藤 喜仙(35)
霜柱	清澤 範子(18)	和歌から派生した季語の本意(その八)	一石(36)
豪雪	金津 文枝(19)	物理学者と詩歌の世界(14)	鮫島 満(38)
卯歳の睦月	近藤 映子(20)	鎌田敬止という人(五十一)	今泉 雅勝(40)
ニューイヤール・コンサート	伊与田広子(21)	絹の話(5)	岡本八千代(41)
楽しみて	半田うめ子(22)	「水魚」のことから(122)	今泉 由利(42)
ヤマトタケル	杉浦恵美子(23)	ことのはスケッチ(387)	平松 温子(43)
健やかに	堀川 勝子(24)	和菓子街道(53)	
若き父母	平松 裕子(25)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規程	

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

わが庭に巣くへる一羽の山鳩はあさの光のさす枝にゐる

P
156

ほろびゆく石のおもてに平行に光ながれて右みなど道

P
159

歌集 一本の木

杉浦 弘

自転車にて帰る川添ひの五里の道いくたびも月の位置は変りて

眠りあさきわれの生命のかなしさを疲るる時のをりに思へる

うつり来て朝な夕なをとびめぐる三羽の鴨が夕空を今

天つ雪

蒲郡 岡本八千代

天空より舞ひ舞ひてくるこの粉雪あま天つ雪とやわれは言ひたし

天つ雪舞ひ舞ふてをりわが住める西浦岬の北馬場ばんばの庭

はてさても天つ空より舞ひ降りるあはれ粉雪ぼたん雪もまじり

粉雪の舞ひつつ暮るる夕べにも米国アメリカの君の便りは来たらず

待ちに待つダン先生の便りは無くつひにこのままの別れとなるのか

そして今日君に送りしXMクリスマスのカードはわが家にもどりて来たり

積もりたる松の根方の白雪もいつしか残雪はだれとなりつつ光る

子規の生まれ兎年とぞ知りたればなにとはなしにこころ愛かなしも

名付けたる「柚味噌会」とはさすが子規自づとほほゑむ寒の夜の更け

後わづかもかけがへのなき人世ひとよかとの夜も静かに眠りゆくらし

春の香り

新城 白井久吉

広びろと続く沃野の中でさへ荒れたる田畑あちこちに見ゆ

珍しく橋の下なる浅瀬にはサギの一群寒ざむと立つ

煎餅せんべいも饅頭まんじゅうもまた飴玉も日ごと切らさず子どものごとく

まねごとの百姓なるを承知にてなほ続けむと地下足袋を買ふ

俎板まなの上にて刻む白葱の色鮮やかに春の香りす

わが家のシンボルとして残したる太きケヤキを切ると決めたり

万病に効くと言はるる足湯器をまた取り出し使ひ始むる

眼科医の待合室の長椅子に五十年前の同僚に会ふ

書家たちの一つ一つの作品に心は和む新聞なれど

大釜に飯を固めに炊き上げて五幣餅作る夢ゆ覚めたり

湧水

東京 今泉 由利

雪と降り氷と凍り水と湧く一番はじめ見守る一滴

あんなにもパピルス群れ生ふ湿原に分け入りゆけるナイル映像
ルワンダの森の木の根に小さく湧きナイルの川となるを見届く

6700キロメートル先に地中海ナイル川の始むるところ

冬色に埋もれるたり標識はホタルブクロの咲くべきところ

殿ヶ谷戸窪地にキラキラ湧き出づるやがて野川と流るる水の

ドアを開け夜のしじまの寒々し正しく確かに木星を向く

一本の鉛筆に描く一本の6Bの線裸婦クロッキー

やうやくに日は暮れきたりやうやくに心静かに暗闇のなか

太陽も風も月も星さえもガラス越しなりひと日の暮るる

くじけるなかれ

豊川 伊藤八重子

プランターも残菊も片付ける年の暮冬將軍はいよよ来るらし

松竹菊大器に入れ終へてほっと息つく迎春準備

一人居の今宵の厨の天窗を打ちつけて降る雹ひょうの音きく

縁側に坐りて弟おとうとの三年忌しみじみと庭にホトトギス見る

亡き友の提げ来し庭の令法りようぼうの木ひこばえ出でてわが身衰ふ

縁かぢどりも清く正しく縫ひてある由生子ゆふこ作りし木綿のハンカチ

東京にてきびしき洋裁修業なす健気な由生子ゆふこよくじけるなかれ

ふくらますわが手の上の紙風船七つの色もはかなき郷愁

音も無く降る雪影を障子に見ゆ子の犬山の家が目覚めて

小面こおもての面わとなりしわが友よ偉大なりし母と子が辞のべたまふ

小正月

豊川 弓 谷 久 子

新しきしめ縄飾る我の手に大つごもりの風花舞ひぬ

見開きに和泉式部の和歌一首書きて今日より今年の日記

中天に眉月淡く残りをり初日拝まむカーテン開く

待ちをりし賀状届きぬ元気らし九十三歳翁の賀状

娘二人の成人式の振袖姿憶ひ出しをり今日小正月

小正月の言葉も聞かぬ世となりぬ旧正月が何時とも知らず

手作りの三色団子小正月に届かずなりぬ古い給ひしか

しんしんと一夜明けたり深々と真白き世界に包まれるたり

大寒の満月空に凍てつきて仰げば冷たし泪目となる

土器発見と何時か聞きしは六光寺みかん山の麓あたりか

初春

伊丹 青木 玉枝

願ひ事ひとつを持ちて初詣で正月二日参道の列に

初春の神の御前にかしこみて願ひを唱ふわが息白し

懐しい賀状を読みゐて時過しみぞれ降れども心は温し

初風呂に米寿を過ぎし身はほぐれ今年へ誓ふ夢を追ひ居り

一年の計を並ぶるその一つ日びを励まむわが歌の道

北帰行ま近し池に白鳥は今日も群なし浮きつ沈みつ

誰も居ない一人のバルコニーパンまきて雀の訪れ待ち待ちて居り

花筏その名に惹かれ今日も寄る宮ノ前通り茶房のあの席

背をまるめ歩くわたしを映したるウインドーがホラ背を伸ばせ

陽に向けてシクラメンの鉢少しづつ廻すも朝の習ひとなりぬ

貴重な

東京 北川 宏 廼

電話とれば「おめでとう」と孫の声ジャカルタにては正月ないよ

観客に中高年の多きかな国立のラグビー大学選手権

わが母のしわしわの手をわれの手に支へて歩む貴重なる十歩

母とわれ二十四時間刻^{とき}あれど待つと経つでは違ふのだらう

幸せは妻とふたりでそれぞれにシフォンケーキを啄^つばむときよ

知ること知らぬことにも成程^{なるほど}とさういへるやうわれもなりたり

五十年時隔つれば同窓会先に名のりて友の名を聞く

町医者に予防接種の人溢ふるインフルエンザも経済効果か

「創業」や「設立」も消え「立ち上げる」と日本語も悲しき口笛

仮免にてジャンボ・ジェット機飛ばすやうな決断をせよ国の政治は

母さんの音

豊川 安藤 和代

水嶋ヒロが齋藤智裕に変わった時「KAGERO」は深く心をゆする
野菜切る音♪母さんの音♪と孫言へば心乱るる音も乱るる

志望校悩める孫にアドバイス出来ず好物の甘酒わかす

ダイエットと菓子をひかえる孫娘少し大人にちよっぴりこどもで
じいちゃんはいつものにこにこしてるから孫は皆んな大好きと言ふ
形でも色でもなくて真心とは孫の手編みのマフラー温し

♪故郷♪を曲練習す孫のリコーダー聞きつ祖父母を思ふ冬の夜

炬燵の孫足が当たった手がふれた言ひ合ひながらもみかん分け合ふ

♪きな子♪なる警察犬の合格を紙面に知りたる孫の歓声

吾が胸に位置しめ育つ孫ゆえに吾れ詠む歌の孫が多きに

誕生日

岡崎 林 伊 佐 子

庭隅に南天の実が赤く輝^てり初雪ちらつくわが誕生日

平穩に世にながらへて健康を守りて吾も喜寿となりたり

娘^こも嫁も勤めを持ちて正月の餅つき手伝ふ夫と息子が

ふる里に杵音たかくひびきて五十年前の子育て思ふ

この年は来客もなく古い二人思ひのままに正月すこす

輝ける明けの明星朝月夜ながめて散歩のひと日はじまる

外灯と車のライトに照らされて足元あかるき舗道をありく

玄関の鍵をかちりとまわしたり家族はみんな目覚めてをりぬ

新年の目標となる早朝の散歩も日課となりて楽しむ

榎木置く山の傾斜の一隅にヒメアオキの朱実艶だつ

木曾の檜

豊川 内藤 志げ

頼みるし漬物用の俎は厚く大きな木曾の檜ぞ

大きさに気後れしてゐる吾れの手に意外に軽いと翁は下さる

神棚の切れ端なりと木曾檜小さき傷を示してわが手に

コトコトと蕪千枚かぶらに刻みをり音たつ度に檜の香り

大きさに気後れしたりし俎に蕪忽ち山盛りにする

柔かな檜の板は庖丁に当りやさしく軽き音たつ

庖丁と俎と共に漬物用わが物となり庫に収めたり

疎らなる藪を透して朝の陽に輝く雪を今踏みゆかむ

傾ける竹より雪の雫れ落つ散るごとと降るごと朝の陽の中

坐り葉に黄に輝よう蒲公英の寄り添うごとき二花の見ゆ

明けの明星

豊橋 胃 甲 節 子

明けの明星下弦の月と並びゐて冴えて煌く吾のあかとき

雨戸引く未だ闇ふかきあかときの下弦の月は吾が正面にあり

夜べ降りし激しき雨を霰かと思ふ雨足の跡を踏みゆく

鶉は白南天の実も穂先より順に喰べゆく上手に残さず

一周忌過ぐる優しき亡き人の畑に数多の柚子実りをり

年賀状の幼はなべて笑顔なり此のまま笑顔の続けと祈りぬ

幾度も軽き眩暈を繰り返すひと日は不安に戦き暮れたり

小さき鉢に自生の万両知らぬ間につぶら赤実のつやつや愛らし

目をみはるばかりに今朝は銀世界稀々なれば只ただ美し

山茶花の咲き次ぐ季節朝夕に紅濃ゆき花びら寄する

リズムよき

豊橋 佐々木利幸

新しき年の初めは次郎柿を一本剪り終へ我は立ち去る

喜寿過ぎたる我は言はれ居り杖を枕辺におきて睡眠をとれと

躊躇といふ語句が出て居りひたすらに我が臨書する欧陽詢の法帖に

積雪の柿の畑へ行くはなし欧陽詢の法帖を今日は臨書して

墨を磨る時の間に間にひたに読み松尾芭蕉の笈の小文を

リズム良き茂吉の五十音を朗読したるテープを聞き居り熟睡を待つ

ゆたゆたと門球の競技に参加したり脹脛の疼痛が消えたる今朝は

底冷えがする今日も昨日も散策に出る我の日課なり

よほよほの歩み方なりと言われてもよし今日も出る五千歩の散歩

朝な夕な我が立ち寄るコンビニの閉店を告ぐるポスター見たり

霜柱

春日井 清澤 範子

厳寒の朝息白く手をさする菜園一面に霜柱立つ

幼き日霜柱踏みつつ歩きたり登校したるよ四キロの道を

吾歩む時は優しく手を引きてくるる娘の手は温かき

副作用なり足重くして杖をつく歩む足元に気をつけながら

今朝見れば雪十センチ積りたり屋根の雪音して落つる

今朝の朝日明るく差し込む部屋にゐて賀状の当選番号三等のあり

踏んばりて畝を作り赤蕪の種播きたるに猫が散らかす

副作用にて足の重きに杖をつきそろりそろりと玄関を出づ

お前百まで吾九十九まで空気の様になく生きてたし

麴にて酒作るも久し振り冷やして飲むなり家族の団欒

豪雪

島根 金津文枝

十二月三十日雪降りはじめどんどん積り八十糶の豪雪となる

豪雪の屋根の雪ずり嵩高く岩倉寺お内儀の電話

三男の夫婦も我を気使うのみ電話で話し身動き出来ぬ

豪雪に千年杉の枝の折れ椿の大木も宮裾に折れ重なる

屋根よりずり落ちそうな豪雪に氷柱は長く凍みいる

島根のみ豪雪居坐りゐるのかと日毎に積るその上その上

電灯を弱に灯して眠ろうとペットボトルナイロン袋ピカピカ光る

一月十八日今年も斉藤茂吉記念歌集の招待状が来た

年末におせち料理の買物し豪雪の中に煮物してゐる

東京より師走帰省出来ぬ長男豪雪に列車の中越年するなく

卯歳の睦月

名古屋 近藤 映子

寅年の飛ぶ様に過ぎて卯歳一日子等を迎へて屠蘇を祝ひぬ

我夫は私の顔をジツト見てテレビスイッチ入れても尚見る

この寒さフード付きコートにマフラーして尚マスクもする

我夫に今日は寒いと語りたり左手握手の力の入りたり

我夫のベッドの部屋は夏も冬も寒暖計は大差なし

少しだけ日暮れ伸びれどこの寒さ七草粥の材料購ひぬ

温たかき小さき餅入れ七草粥をすすれば元気になる氣して

正月の十四日歌会始めの両陛下おすこやかなるお姿美し

数えれば吾七十六歳となりてをり信じ切れない今の今まで

まだくと夫の様子の氣になりて通院するも家路は淋し

ニューイヤークンサート 豊橋 伊与田広子

日当りに季節はづれの白百合の花や蕾のあるを見つけぬ

白百合は寒さ加はり小さきままほそぼそ咲きぬ冬枯れの庭

正月のわが唯一の楽しみはウィンフィルニューイヤークンサート

今年はりスト生誕二百年リストのピアノ曲管弦楽に

われには耳新らしき曲ばかり最後は美しき青きドナウ

テレビにてサンデル教授の講義聴くハーバート大学公開講座

学生とわれも一緒に考ふる学生時代思ひ出しつつ

学生にサンデル教授問いかくるわれも一緒に考ふるなり

寒き日に家に籠りて外に出ず人声も聞へず静かなり

この寒さ何時まで続く老いの身は買物に行くも躊躇してをり

楽しみて

新城 半田うめ子

講演をたのまれたりき一宮の外山先生より若き日なりき

楽しみて読みてゐるなり茂吉の本大須賀先生に頂きたりき

一人暮らし今日の昼食野びるつみ味噌汁の中へ入れて食むなり

雪降りて歩道にて若者転びたりしばらくじっとして居りたりき

転びたる若者しばらくじっとして立ち上りたり元気に歩く

暮れなづむ吾が道辺にて真白なる雪の激しく降りつもり居り

吾が孫は料理上手にて時折りに吾が杉山へ手持ち来たりぬ

風強く杉の葉舞ひぬ歩道にて遠近に落つるを多く拾ひし

生け花に好みでありし水仙の今年又咲く吾が庭中に

ヤマトタケル

蒲郡 杉浦恵美子

古事記と大きく板書す我が最後の古典の授業はヤマトタケルか
古事記のヤマトタケルの辞世をばしみじみと読み授業を納めむ
その昔思ひ描きし行く末の古典教師を今了へむとす

手間などは要らぬひたすらことごと鍋いっぱいの黒豆煮てゐる

一粒も残さず瓶に詰めましようつやつや黒豆喜ぶ顔あり

今年のは少し甘みが強いねと感想メール我の黒豆

生徒等にプリントやらせて窓の外本宮山を眺めて居たり

白一面明治新田覆ふ雪センター試験受験者思ふ

大雪に滅茶滅茶乱れしスケジュール収束したり中天の月

大気冷ゆ一瞬見上げて首竦む大寒前の中空の月

健やかに

豊川 堀川 勝子

健やかに家族揃ひぬ元旦と「三年日記」の出だしに記さむ

明日の朝は零下なるらし足首を夜更けの寒気登り来るなり

「ひだまりお野菜」と誰か名付けし干し大根甘きその香の部屋に満ち満ち

健脚には自信なけれど我が挑む山頂遙か本宮山の六合目まで

本宮山の山のなだりの草々はうなかぶしつ雪のひと色

本宮山の急勾配の岩を登る前行く友の背頼もしきかな

例えれば「寅さん」目線の弟よ嗚呼弟よ病に勝てず

厨事終えて見上ぐる夜の空ふいに涙が流れてならぬ

娶るなく還暦も越ゆ弟の入院準備の下着を折りぬ

栄養のバランスよろしき病院食は我が為によしメモにも残す

若き父母

豊川 平松 裕子

みかん畑に稲藁一面に敷かれをり草取る老の姿なくして

白き帽子白き衣服の山畑の案山子は一步踏み出す姿

古き名は大門坂と伝へ聞く観音寺跡はこの坂の上

この坂を大門坂と呼ぶ人のひとりもあらず時移ろへり

坂半ば見上ぐる椎の大木の更なる上を渡りゆく風

猪も鹿も何処に潜めるか風の音のみ通り過ぎゆく

棚田なす最上段が我が家の田なりし日は四十年前

杉の木の植樹林となりし地に田を作りしは若き父母

誰も踏まぬ雪に一步を刻むとき心は二極に交錯しをり

ポストまでの我が足跡をたどり戻る真白く深き雪の朝に

雪の道ゆく

豊川 小野可南子

ま南より深く差し入る陽光に我が鉢草の緑いきいき

寒椿の生垣めぐりて引き帰すパーカー目深の今日の五千歩

白川の渾なす水面に飛沫上る鯉か鳩かとしばらくの間を

待合室の我のアクビは向ひ合ふ若きにまでも移りてゆきぬ

花片のかたちに舞ひまふ今朝の雪その一片の地に溶けるまで

日照雨そばえならぬ小さき粒の雪が降るさながら朝の日キララ零るる

パーカーの真白の我の今朝の道ま白に厚く雪の道ゆく

我が影の黒きに従ひウオーキング雪積む白のこの朝の道

フワフワのたまごにつつむオムライス今日も今日とて挨拶がはり

干し柿は洗濯バサミに干すのかと園児佑真の今日の質問

過去と

豊川 山口千恵子

秒針はかすかに音を立てめぐる際限もなき過去つくりつつ

一秒毎つみかさねつつ過ぎゆけり今はたちまち過去となりゆく

元旦の空は雲なくしづかなり茜さしきぬほのぼのとして

一寸ほどのびたる麦の畝の上茜さしきぬあかあかさしきぬ

あたたかき朝の光を背に受けて今年初めの田の道ウオーキング

出ではじむ光る朝日を拝みたりあらためて思ふ東の方角

この夏の暑さの中に稔りたる大豆は意外に虫喰ひ少なし

わが庭の草も芥も被ひつつ全てま白にやさしき朝

一面の白に丸く黒き処踏石の形に雪とけてゆく

男爵にメイクインにキタアカリ三種類の種薯提げもつ

薩埵峠

豊川 夏目勝弘

霜枯れの草ぐさ凌ぎ一本の三角錐のアロエの紅

峠への辻辻に観光の導しるべあり防人たちはひたすら西へ

峠への狭き家並のどの家ぞ電話のベルのまだ聞こえきぬ

峠路に会へる軽四の運転は老人また女をみなばかり

土道を短かく行きて峠に立ちぬ写真に馴染の富士に会へたり

峠まで今を盛りとビワの花青き冬空に目立つことなし

峠路に沿ひて植ゑある河津桜点点と咲き海の青に

遮ぎるもの何も無き今日の富士の山同じポイントにて皆写しゆく

快晴の冬空のもと富士山を見つつ早い握り飯二つ

手のすべりビール零しぬ峠にて薩埵地蔵への捧げ物とす

風
秋山逸穂

川かぜのとおる畑に腰を折り大根を抜く農夫が見ゆる
高層のビル街吹き抜く風にのり紅葉も黄葉も空かけのぼる
並木道を公孫樹と柳がはさみ立ち細き葉広き葉散らしいるなり
堀端に紅葉ながめて座りおり風は枯葉の匂いをはこぶ
りゆうりゆうと風吹きすさぶ夜の空に青くまたたく星星が見ゆ

「パリ2011年1月」 井村喬泉

糞尿にまみれし駅のエレベータは地下へずんずん沈んでゆくなり
聾啞者の少女に寄付を求められ嘘と知りつつ金を渡しぬ
スリたかり多き街なりまつとうな職なきことを憐れむべきか
日本へ寒波が来しと早口のBBC英語がロビーに響く
銃声は駅舎に響く大方は馴れた顔して歩みを止めず

『いふよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ブルーブリッジ渡りつつあり遠々と海にひろがる黄砂のけぶり

稲吉友江

小春日の朝の光の中に咲くわがチェリーセージのハーブの紫

鈴木美耶子

輝ける朝日の中に表札を幾たびも拭くこの年の暮

吉見幸子

ジグザクの歩道の続く神田街行きつもどりつ古書店めぐり

牧原正枝

古稀すぎし仲良し三人と飯田線に景色は見ず^こにただ話しばかり

岩瀬信子

黄の実のつきたるままに扱^こがれをり君が植^{ヒメタチバナ}ゑにし姫橘は

三田美奈子

常ならば冬の絵になる渡り鳥ロマンならざり悩みのたねに

伊藤忠男

鳥が鳴き騒がしきが鶏舎なり今哀しみのふるさとの村

暖房の部屋を出でて凍りつく背押されゆくビル街の風

ひとつつつ星消えてゆく冷えびえし明らみきたり散歩の道は

白井信昭

明け方を散歩してゐる音羽川今年の初氷薄くひろがる

東の山の稜線赤くしていまし見え初む巨き太陽

贈呈誌 一月号

「滋賀アララギ」

澤 享

「愛媛アララギ」

清水 正男

「穂の原」

松 井 花 子

胸の上に指組み合はせて眠る癖のいつか習ひとなりし宵々

花ボタンにパンジー添へし鉢植を弱き冬陽の玄関口に

「鹿児島アララギ」

福 元 覚

中 井 美 恵 子

方竹の黒き筍生れきて秋の吾が庭に聳え立ちたり

剪定を終へて庭師は水甕に紅梅一枝残してゆきぬ

「高知アララギ」

楠瀬 兵 五 郎

田 中 浄 子

いまだ青きものら朝露に輝けり拾ひし亀の子はポケットにあり

石巻の山の端よりの初日の出この日この時今年も我が身に

「冬雷」

川 又 幸 子

歌集「此の日の時」

赤 羽 佳 年

寒さ増す夕草むらに虫一つ今宵かぎりとはかり鳴きをり

見定めて歩き出す足ふはふはと心許なく夏の陽を浴ぶ

「柗」

勝 木 四 郎

楽しめる時あり哀しめる時もあり振幅変移は年年かはる

湧く水を囲ふつくばひ時折に百舌の来りて贅洗ふとふ

最上川逆白波を詠ひましし茂吉の川は穏やかな初夏

「檜の木」

塚 本 明 夫

麦の穂の丈を揃へて広ごれる下野の野をバスにみつづ来る

廃船をつなく鎖に嘴そろへ飾りのごとくカモメが並ぶ

舗装路の轍に油膜光らせて雨のたまり水夏の日反す

「群山」

佐 藤 嗣 二

冷蔵庫の作動音の間隔が短くなりて熱帯夜つづく

側溝に掛け渡す巢に絮あまた付けて孤高を守る女郎蜘蛛

四六時をみんなみんなみんづづけしが今日の夕より虫にかはりぬ

「俳句」

蒼天や突き刺すように冬木立

植村公女

パソコンと缶ビール開け初日の出

冬夕焼二三歩あゆむ遠目癖

最果ての地や核知らず鶴の来る

一石

暗黒の物質あるとや冬銀河

春を待つ古木に雪の重きこと

雪霏々^{ひひ}と鉄鉢^{てつぱつ}に喜捨^{きしや}の少なかり

喜仙

冬菊の夜目にも白き花かかく

春着^{はるぎ}の子袖振る毎に鈴の音

ギシギシと固くなりけり初雪や

皓一

軽やかにメロディ浮かぶ去年今年

ゴルフボール氷霧を散らし昼下がりに

私の一首

酷暑日に絵手紙の墨摺りをれば瞬く間に乾く硯石

金津文枝

絵手紙は下手な程面白いと甘い言葉に誘われ七年前に社会福祉事務所で始め、会員十名、顔彩、梅皿、水入れ、画仙紙、筆、陰刻印、硯、青墨、ティッシュを揃へ、まず林檎を良く見、大きく書く。水の量で初め黄色を薄く、筆に赤を、陰陽に実物に似る様に顔彩を筆に梅皿で交ぜる。粘りが出る。絵手紙の硯巾二糎。私は小学校書道の硯、絵筆長短四、五本。わくわくどきどき絵を仕上、陰刻印押す。硯の水瞬く間に乾く。硯を青墨で摺る。今年の酷暑油断隙も暑さに参りました。

猛暑の中八王子神社へ詣でる神殿の御幣涼風にゆれる

清澤範子

私は毎日の様に健康とリハビリを兼ねて、近くのスーパーに自転車が出掛けます。その途中に八王子神社があり、神殿の前にて拝礼するのが日課です。今年は九月に入っても猛暑の続く毎日でした。境内には、あべまき、栃の木また楠木等がこんもり繁り涼しい風が心地良く柏手の音も凜と響きます。拜殿に立ててある御幣が風にゆれて、願ふ気持が神様に届くのを信じこの歌になりました。磯夫先生の写生の歌心を詠み続けたいと思います。

暑くとも出掛けて行つて夫の手を握り合ふ時安心の時

近藤映子

夫の病院に見舞いに行き、入室前に手洗いして左手握手をする「今日も暑いよ」と声掛けすると夫の左手の握手に力が入る。不思議と私の気持も落ち付く。そのままの気持である。夫が倒れて六年入院の夫の見舞いを続けている。春夏秋冬、夫の転院は今の医療体制とかで八回目、どこに転院しても通い続けている。

この夏も暑い日々が続きました。しかし入院中の夫見舞いは暑いと言って止めることは出来ない。今の私のそのままの事の一首である。

和歌から派生した季語の本意（その八）

「笹」 佐藤喜仙

21 帰雁（雁の別れ・夕残の雁・帰る雁）

「春霞立つて見捨ててゆく雁は花なき里にすみやならへる」

伊勢（拾遺集）

「故郷の霞とびわけ行く雁はたびの空にや春をくらさむ」

紀貫之（拾遺集）

渡り鳥は数多い中でも、古人が最も愛したのは雁であった。当時は現今と違って飛来する雁の数も多かったであろうし、鴨などと比べると一まわり大きく、群をなして秋に飛来し春先には去って行く雁に、ものあはれを深く抱いたのであろう。

例句

大風の風ぎし夜鳴くは帰雁かな

夜毎敷く敷あわれこまかに雁帰る

さらさらとまだ見ゆ雁の別かな

22 水草生ふ（水草生ひそむ・藻草生ふ）

「古の旧き堤は年深み池のなぎさに水草生ひにけり」

山部赤人（万葉集）

「絶えぬるか影だに見えは問ふべきを形見の水は水草るにけり」

右大将道綱の母（新古今集）

春になり水が温むと、池や沢や沼にはいろいろな水草が生えてくる。水中に沈んでいる数々の藻、水面に浮かんでいる萍うきくさの類、水底に根をおろしている菱ひし、河骨こうほね、蓴ぬなわ（じゅんさい）、蓮、水葵など多くの水生植物が芽ばえる。蓴などはその若芽、若葉が食用として珍重される。

例句

ゆふぐれのしづかな雨や水草生ふ

水草生ふ風土記ふどきの村をたもとほる

水草生ふ絶えてひさしき伊勢詣で

23 淡雪（牡丹雪・綿雪・たびら雪）

「巻もくの檜ばらの未だくもらねば小松が原にあは雪ぞふる」

大伴家持（新古今集）

「春さては花ともみよと片岡の松のうはばにあは雪ぞふる」

藤原仲実（新古今集）

淡雪を冬として詠んだ歌もあったが、新古今集から抽出した冒頭の二首により春と認識されたようである。春になって気温が上がってから、降る雪は、結晶が互に密着し合って大きな雪片となり降っても融けやすい。それ故冬の雪とは違った趣があるのである。

例句

淡ゆきや幾筋きえてもとの道

淡雪のつもるつもりや砂の上

牡丹雪遷都は湖の見える地へ

千代女

万太郎

甲子雄

草城

風生

龍太

物理学者と詩歌の世界 (14) I・W・パウリ

一 石

ヴォルフガング・エルンスト・パウリ (Wolfgang Ernst Pauli, 1900-1958) はオーストリア生まれのスイスの物理学者。スピンの理論や現代化学の基礎になっている「パウリの排他律(あるいは禁制原理)」の発見など、20世紀の物理学における2大革命の1つ量子力学の分野で数多くの重要な業績を残した。1945年ノーベル物理学賞を受賞。

パウリはウィーンのギムナジウムを卒業後、若干18歳にして当時理解できる人は極めて少ないとされていたアインシュタインの一般相対性理論に関する初めての論文を発表。この早熟な天才はミュンヘン大学のA・ゾンマーフェルト、ゲッチンゲン大学のM・ボルン、コペンハーゲン大学のN・ボーア等、当時最も影響力のあった物理学者の下で研究。その後ハンブルグ大学の講師を務めた(1923-1928)。この時期、特に「パウリの排他律」(注1)の発見や非相対論的スピン理論(注2)の定式化など量子力学の構築に寄与した。1928年、パウリはスイスのチューリッヒ連邦工科大学の理論物理学の教授に任命された。

さらにベータ崩壊に関してもニュートリノの存在を予言した(1930)。当時不可解とされたベータ崩壊で放出される粒子のエネルギー

ルギースベクトルの連続性を説明するために、電氣的に中性で質量の小さく物質とほとんど相互作用をしない謎めいた粒子(ニュートリノ)の存在を提唱したのである。ニュートリノは1959年になって初めて実験的に観測された。

ユダヤ系のパウリは第二次世界大戦中に米国へ移住し、プリンストン高等研究所の教授となった。1946年に彼は米国に帰化した。その後チューリッヒに戻り人生の後半生を過ごした。

パウリは独特の強い個性の持ち主であった。例えば研究成果を論文形式で発表することよりも、ボーア、ハイゼンベルク、シュレーディンガー、ハーン等の親しい物理学者と個人的な手紙のやり取りにより知らせるといったスタイルを好んだ。そのため彼のアイデアや成果はこれらの書簡のみに残され正規の論文としては残されていないものもある。

パウリはそのオーラにより実験装置の故障、誤作動等何かと不具合が生じるという伝説が広がった。彼のこの奇妙な能力は「パウリ効果」と呼ばれ、実験家は実験中に彼が近づくことを極端に嫌ったと言われる。

物理学に対して完全主義者であったパウリは、学問の研究に関しても自身に高い基準を課したと同時に、他人の論文のあいまいさについても痛烈な鋭い批判を加えた。逆に、彼に認められた論文は「パウリのご裁可(sanction)を得た」と、まるで神の審判を得たかのよう

あった。パウリは「物理学の良心」とも呼ばれ、物理学者のコミュニティでは最大級の尊敬を集めた。専門分野の著作に『相対性理論』、『量子力学の一般原理』、『パウリ物理学講座』（いずれも講談社刊）がある。一時期、深刻な精神的不調から深層心理学の大家カール・ユングの診察・治療を受けた。やがてパウリは、ユング理論の認識論や思想に共鳴し、特に「シンクロニシティ（共時性）」の概念（注3）についての科学的な説明を与えるまでになった。二人の天才の書簡によるやりとりは共著『Atom and Archetype : The Pauli/Jung Letters』1932-1958』として出版された（邦訳：参考資料2）。またパウリの講演やエッセイを収録した『物理と認識』では、パウリの興味は心理学、哲学、科学史から芸術、宗教、超能力にまで及んでいる。物理学に留まらず、精神構造の秩序や法則性を探求し、まさに人間の知性の限界に挑戦したのである（参考資料3）。

パウリの言葉から。

○「…もし積極的な成果が、超能力の (extra sensory perception : ESP) の (いまだ) 論争のある (領域で、最終的に真なることが証明されるはずであるとしたら、このことから今日でもまったく見通すことのできないような発展に導かれることもありうる。」(参考資料3)

○「Das ist nicht nur nicht richtig es ist nicht einmal falsch!」(この論文は間違っただけでいい！)「これはかつてパウリが誤りを見つけたある論文に対して彼がと述べた有名な言葉。

○「…生命現象を自然科学の一般的潮流に接続させることこそがその発展のために決定的であることを私は期待する。」(参考資料3)

注1:「パウリの排他律(あるいは禁制原理)」は、「原子や分子の同じ量子状態には2個以上の電子が存在できない」とするものであり、量子力学における極めて重要な基礎法則である。

注2:パウリはスピノ演算子の基底としてパウリ行列を導入したスピノの非相対論的理論を定式化し、水素原子のスペクトルを見事に説明した。この成果はポール・ディラック(参考資料4)に影響を与え、後にディラックは相対論的電子を記述するディラック方程式を発見した。

注3:「シンクロニシティ(共時性, Synchronicity)」とは、何か2つの事象が発生し、因果性では関係を持たないのに繋がりがあられると思われる現象(相関性)が生じることをいう(参考資料5)。

参考資料

- 1) ウィキペディア (Wikipedia) : ヴォルフガング・パウリ
- 2) カール・グスタフ・ユング & W・パウリ、『自然現象と心の構造 — 非因果的連関の原理』、海鳴社
- 3) W・パウリ、『物理と認識』、講談社
- 4) 三河アララギ、p 36、第58巻、第2号(2011)
- 5) ウィキペディア (Wikipedia) : シンクロニシティ

鎌田敬止という人 (五十二)

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流 (13)〉

この手紙に対して光太郎は、

六月一五日付のおてがミ（開封検閲済）昨十九日に届きました。『智恵子抄』の原稿到着の由にて安心しました。大変延着のやうですが、やはり検閲でもうけてゐたものかと推察します。『智恵子抄』の体裁などもよろしくおまかせいたします。（中略）今日原稿をよみ直してみて左の訂正をお願いいたしたくなりました。校正の時御訂正願上げます。「松庵寺」中

否× 和尚さんの衣のすそさへ濡らしました。 旧
正○ 和尚さんの衣のすそさへ濡れました。 訂正

右お願ひいたします。

（昭和二十二年六月二十日付）

と返事している。原稿が揃うと鎌田の仕事は早く、七月にはもう校正が出はじめ。その進捗状況を知らせる手紙の中には、「次に検閲に校正刷と共に出す著者履歴書の記載項目中に昭和二十一年一月以後新聞雑誌に発表されたものの題名、種類、新聞雑誌名、巻号数、発行年月日が必要なのですがお知らせいただけたらと存じます。」（昭和二十二年九月八日付）という記述もある。こうして『智恵子抄』はほぼ予定通りに昭和二十二年十一月に出版された。

話は少し戻るが、『智恵子抄』の完成直前に気になることが二つ起きる。

その一つは、光太郎の宮崎稔宛の手紙に、「鎌田敬止さんからは長い間便りがありません。御病気ではないかと案じてゐます。」（昭和二十二年十一月十五日付）とあることに関わる。しかしこれも間もなく届く鎌田からの手紙によって光太郎の安心するところとなる。安心した光太郎は、

おてがミ拝見、しばらくおたよりがなかつたので、もしや御病気ではないかしらと心配してゐましたが、青磁社にそんなとりこみがあつたのですか。それでも病気でなくて安心しました。『智恵子抄』も来月出る由。

（昭和二十二年十一月二十五日付）

と鎌田に書き送っている。病気ではないかと心配したのはその通りであらうが、内心、出版不能の事態が発生したのではないかと心配もあつたのではないかとも思われる。そして、右の「そんなとこみ」とは何か。鎌田はそれを光太郎に手紙で、

それはさて青磁社に異変があり、十月から社員十三名も一時に退社するといふ事になりましたため、残つた社員はほんの数名に過ぎなくなつてしまひました。(中略) そんなことがありましたため勢ひ私が身を引いて専心白玉書房の自営にはげむことも事情が許さなくなりました。編集企画陣は総退社して事実私一人だけになりましたので。

(昭和二十二年十一月二十二日付)

と説明している。鎌田は青磁社に役員として身を置く一方で白玉書房の活動をするという忙しい日々をしばらくは送ることになったのである。

もう一つの問題は、「智恵子抄」の版權にかかわること、これを知つた光太郎は鎌田に、

三日に『智恵子抄』三冊届きました。もつと譲つてもらひたいのですが御都合がさつぱり分らないので、これであきらめます。昭森社の森谷さんから先日手紙が来て、中に澤田さんが「智恵子抄」再出

版をフンガイしてゐるといふ事が書いてありました。面倒な事があるのでですか。

(昭和二十三年一月十五日付)

と尋ねている。鎌田による『智恵子抄』の再出版を承諾したはずの澤田が「フンガイ」しているというのだから事は穏やかではないといふべきであろう。その澤田の「フンガイ」を知らせてきた森谷均の手紙とは、

過般希望を申出ました事のうち「智恵子抄」は旧臘度々澤田君来訪、この際他の紙型を処分しても再興第一歩の仕事としてあれを出版したいから助力しろとの申出であり、非常に結構な企てとして進行中、鎌田氏から出版のことをきき、澤田君は鎌田君に譲渡の意思は全然無いと相当憤慨してゐましたけれど、之は澤田君の意思表示の不足と考へられる節もあり、止むを得ないことと存じます。澤田君は彼の出版物の紙型は全部保有して居り、「智恵子抄」が鎌田氏から出るなら「某月某日」のうちから時局的文章を省いて「千羽鶴」と改題、この出版を鎌田氏に引受けるやう申込みましたところ、之は鎌田氏の拒絶するところと成り、あれこれと焦慮して居ります。

(光太郎宛、昭和二十三年一月五日付)

というものである。

絹の話 (3) 「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹は不老長寿の薬と言われたのは、繭を口で噛み蛹を食べていた遙か昔の事でしょうか。

実は今日でこそ、機能性利用の絹の利用範囲は健康衣料、食品添加など含めて限りなく広がっています。

それでは、絹にはどんな絹が有り、どんな働きをするのでしょうか。地球上には10万種以上の絹を作る生物が棲息すると、(1)で言いましたが、一般に世間で見られる絹は、白い糸(黄色糸も少し有る)、桑の葉で屋内飼育される家蚕(カイコガ科)と、茶、グリーン、金色などの有色で、桑の葉以外の広葉樹の葉を食べ屋外で育つ野蚕(ヤママユガ科)の二通です。

野蚕絹の機能性はいずれも家蚕絹より優れていますが、飼育、糸作り極めてむずかしいので、世界中で各種ほんの少量しか生産されていません。

絹を着ると言う観点から機能性を見ると、第1に抗菌性、防臭性に優れています。絹は各種菌の殺菌はしませんが繁殖を抑制します。従って汗などがアンモニアに分解される事を止めますので、汗くさくなり

ません。綿の下着は毎日取替えますが、絹の下着は4日間位大丈夫です。絹の靴下等も同様です。

院内感染を防ぐ為にも絹のシャツや下着、パジャマをお使いください。但ししなやかで高価な絹より、綿の様な感じの少しゴワゴワした安価な物の方がより効果があります。体臭、老臭防止にもなります。床ずれ防止にも役立ちます。風呂などに入らない平安貴族も絹のおかげで十二三重の中も衛生的だった様です。

第二に保温・放温、保湿・放湿性に富んでいます。絹は蛹を守る為の生命維持装置です。温度、湿度をいつも一定に保とうとします。

従って絹を着用すると品良く温かく、しっとりして気持ちが良いのです。抗菌性と相まって風邪などひきにくくなるばかりか、肌に潤いを与えてくれるので、年配になったらご着用をお勧めします。

また絹は綿の2~4倍の早さで乾きますので、気化熱を奪われる時間が短い為、冬山登山では命拾いする事が有ります。

第三に防紫外線性です。絹は短い波長を反射、吸収する性質が有りますので、ストールなど日焼け防止にご利用下さい。

つづく

「氷魚」のことから (122) 岡本八千代

テレビの「坂の上の雲」では去年の十二月の暮に、子規の最期を上映した。その時のようすを書いてみよう。

「妹の律が紙を貼った画板を子規に渡した。子規はその画板の左下を手で支え、画板の上の方は妹が持った。碧梧桐が墨を含ませた筆を子規の右手に渡すと、いきなり中央へ、糸瓜咲でと書きつけた。『咲いて』の字がかすれたので、碧梧桐が墨をついだ。

今度は「糸瓜咲で」より少し下げて、疾のつまりしと一気に書いた。また墨をつぐ。『次は何と出るかと、暗に好奇心に駆られて板面を注視して居ると』、仏かなと書いた。以下略（坪内稔典著「正岡子規」P204に依る）

まさしくその通りであった。——明治三十五年九月十九日午前一時ごろ、子規はひそかに息をひきとつたのであった。高浜虚子も、ちょうど介護当番であった十七夜であった。

子規逝くや十七日の月明に
という虚子の句がある。

碧梧桐の「子規の回想」には、死後の子規を「子規はちよつと触つても声を立てそうに見えた」と言っている。また、子規の母親は、左向きにぐったり傾いている肩（子規の）を起しにかかって「サア、も一遍痛いというてお見」とかなり強い調子で言われたということである。そして、涙をばたばたと落してみえたということであった。

私は、「病牀六尺」や「仰臥漫録」を読み、テレビで彼の最期を観、人間のこの世との永訣ということを想いつづけた。そして今もなお、その人にとって、その人のありかたがあり、その人の永訣があるのだ

と……。それは、どうすることもできない何かなのだろうか？と……。

さて、ここから「山吹の一枚」の続きに。

第七回 投球会 花ぬす人稿

鉄面居士紀尾井三郎は、伶俐な人、人に負けることを嫌う。随つて人に秀ずることが多い。見かけによらず多能多芸。小説、俳諧の門に遊ぶ。そして、

○人を笑わす

○人をいじめる

○見た目はおうようであるが、なかなか愛嬌者でもあった。

○すます処とうぬはれる処がそのきずであった。

とにかく得難き青年であった。

○三郎が住居する下宿屋には同国人のみの集会なれば下宿せし人たちは皆互に相知つて、たいへんむつまじく晚餐の前後などは遊戯を共にするの風があつて、真に和氣洋洋の中に日を送っている者ばかり。

○とくに山咲という一少年は、軽捷猿の如くで、軽業師も三舎を避くべき程の技を演ずる者であった。

○そこで、山尾、筆、章多などの人々は尽力してベースボールという遊戯を教えてより、宿生はいつのまにか此の遊びにのみ耽り、ついに紀尾井もベースボールの会に入った「医者だから指一本でも痛めていけないと一度は、止めたが——」

○書生二十人余り上野までくり出す。この時、紀尾井はピッチャーと第二ベースとの交代であったが、殊に愉快そうにかけまわっていた。——しかし、紀尾井のボールが観客のある美人の胸に当たり美人が倒れてしまった。以下、次回へ。

ことのはスケッチ (387) 今泉由利

『原子』

星が生まれ、星が爆発し、宇宙に散らばった元素が集まって地球ができた。

星屑の地球に生命がはじまり…人間へと繋ぎ、宇宙も地球も人間も、すべての物質は1センチメートルの1億分の1程の小さな粒の原子でできているのだという。

宇宙における太陽系では、はじまりは水素とヘリウムしかなかったそうだ。水素は最も多く存在し、最も軽い元素であり、原子核に陽子を1個もつ、2番目に多いヘリウムは陽子を2個、炭素は6個…最も重いウランは92個と、原子核の中の「陽子の数」によって元素の種類は異なるのだと。

プラスの電気をもつ原子核どうしはお互い反発しあってしまうけれど、超高温、超高压、原子核どうしの猛スピード衝突の核融合反応により多種類の元素ができたのだと。

ここでやっと加速器の意味がわかってきた。高エネルギー加速器研究機構へ幾度も出掛け、そのことは未来をみている心地だったけれど、命をかけた研究を、命でもって試された戸塚洋二博士の「がんと闘った科学者の記録」を読んだ。

『抗がん剤治療…骨への転移、放射線で痛み止め治療をやるうということになり…電子リニアックで加速した電子を標的につづけてエックス線を発生させ、そのエックス線を患部に照射するのです。』

機械を見るとドイツのシーメンス製でした。たいした加速器でもないのになぜ日本製ではないのだろうか、などと余分なことを考えていました。

リニアック全体を回転させエックス線の方向を上向きから下向きまで少しずつ変えて右肩に照射。右肩には常にエックス線が当たり、他の体には集中してエックス線が当らなくなるので放射線障害を減らすことが出来る。照射は1、2分で終わった。

放射線治療の効果を大いに期待しました。当日夜、かえって肩の痛みが増えました。放射線の先生によると、反応性痛みとのこと、翌日から期待に胸を膨らましました。痛みは少し減ったような気がしましたが、無くなることはありませんでした。残念無念』

「加速器とは」「加速器開発とがん治療への応用」とか…とても知りたかったから、講義を受けた。

加速器を使って発生させた中性子を当て、核分裂する物質を利用した「がん放射線治療」。がん細胞だけを破壊させることが出来る臨床例は増え、病院に設置した加速器を使って、万人への治療がなされるようになるだろう。

陽子線がん治療、炭素線がん治療、どの症状に、どの放射線治療が効果的か…研究は進み、人間を、3Dコンピュータグラフィックでシミュレーションし、患部を定めて照射する。

身体を傷めることも、痛めることもなく日帰りでの治療が可能という。もちろん症によるだろうけれど。

宇宙の元である物質を探しだし、工夫し、宇宙の申し子人間の病を直すという、ロマンチックに遭遇し、胸が高鳴っている。

和菓子街道 (53)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

松平十一万石のお膝元、桑名。江戸時代に桑名城に麩を納めていた店が、今も変わらず営業を続けているというので、訪ねてみた。現存する史料から天保元年(1830)創業としている納屋清だが、実際にはもっと歴史のある店のようなのだ。

納屋の屋号は中世頃からあり、その多くが廻船問屋出身。納屋清もそんな豪商の一軒で、江戸時代には麩屋として城に麩を納めていたそう。「御用人」と記された藩の証文も残っている。

納屋清の麩は、加工に繊細さを要する生麩。手鞠麩や季節の花などの型にはめて作る型麩は、見た目も華やか。特におもしろいのは「あんふ」。餡入りのいわゆる麩饅頭だが、江戸時代にはこれ、お汁の具だったとか。半信半疑ながら、買い求めて自宅で澄まし



汁に入れてみたが、これが思いのほか合っているから驚きだ。桑名の殿様のいとも不思議な食卓を覗いたような気分になった。

さっぱりとした餡入りの美しい「あんふ」は麩独特のもちもち感が癖になる。

◆納屋清

住所：三重県桑名市南魚町68

電話：0594-23-6866

お知らせ

▽四月号原稿は、三月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の一六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

▽「絹の話」を連載中の今泉雅勝氏により、「ワイルドシルククフェスタ」が開催されます。

二十三年三月二十四日(木)～三十日(水)
豊橋丸栄、六階。

筆者より直接「世界の絹の話」を伺えることでしょうか。是非お出掛け下さい。

▽講演会(丸栄十階特設会場)

三月二十六日「絹と美人と健康」
三月二十七日「絹の歴史と環境保全」
両日とも午後一時三十分から

編集後記

△年が改まったという感覚が、抜けきらないまま、三月号の編集となりました。

今年は何年になく寒さの厳しい日が続き、雨も少なく乾燥した日が続いています。インフルエンザの流行も取沙汰されていきます。杉の花粉の飛散も早いとも

一月半ば、当地には珍らしい大雪となりました。白一色の美しい雪景色は、心清められる思いひとしおです

△三河アララギへの投稿歌稿、原稿…、すべて東京の今泉由利へお届け下さい。

△地名、人名、又読解のむつかしい熟語等にはルビをつけて下さい。

校正の見落としによる誤りも時に見つかります。校正にあたるものとして、今以上に努力してゆきたいと思っています。次第です。(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができ、

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができ、毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十三年三月二十五日印刷 第五十八巻 第三号
平成二十三年三月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利

三河アララギ会
三河アララギ発行所 〒四四一・〇三二一
豊川市御津町御馬西三七

URL

TEL (〇五三三)七五・二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇・六・五六三二九
E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumiyun.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美